不気味な話

2

夏目漱石

kawade bunko

不気味な話2
夏目漱石
◈
著者　夏目漱石

一九九五年三月二五日　初版印刷
一九九五年四月　四日　初版発行

発行者　清水勝
発行所　河出書房新社
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-三四〇四-八六一一（編集）
〇三-三四〇四-一二〇一（営業）
振替口座　〇〇一〇〇-七-一〇八〇二

デザイン　粟津潔
カバー装丁　建石修志

印刷・製本　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1995 Printed in Japan

ISBN4-309-40442-1

河出文庫

不気味な話 2

夏目漱石

kawade bunko

河出書房新社

目次

●死と異境

倫敦塔　7

幻影の盾　32

薤露行　67

●死と日本

吾輩は猫である（抄）　102

琴のそら音　110

趣味の遺伝　149

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

●死と夢幻
夢十夜　208
永日小品（抄）　238
●死と日常
変な音　272
思い出す事など（抄）　279
〝不気味〟の構造――解説にかえて　芳川泰久

不気味な話2

夏目漱石

本書は、夏目漱石が遺した小説・エッセイの中から、幻想と怪奇の彩り濃厚なる作品を蒐め収めたものである。遙けき異境の緑陰から、東京下町の路地裏から、あるいは夢の深層から、さまざまに立ち現れる〝死〟の幻影が、修善寺大患という現実となって作者に襲いかかるまでの臨死（ニアデス）幻想の物語として、本書全体を一篇の〝不気味な話〟としてお読みいただくのも一興だろう。

本文の表記は新字・新仮名とし、難読語には振り仮名を付した。また代名詞・副詞・接続詞の漢字表記や送り仮名の不統一については原文を尊重し、振り仮名を補うことで処理した。底本には岩波書店版『漱石全集』（昭和四十～四十二年）を使用した。

倫敦塔

二年の留学中只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行こうと思った日もあるが止めにした。人から誘われた事もあるが断った。一度で得た記憶を二返目に打壊わすのは惜い、三たび目に拭い去るのは尤も残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。

行ったのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理抔は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出された様な心持ちであった。表へ出れば人の波にさらわれるかと思い、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑い、朝夕安き心はなかった。此響き、此群集の中に二年住んで居たら吾が神経の繊維も遂には鍋の中の麩海苔の如くべとべとになるだろうとマクス、ノルダウの退化論を今更の如く大真理と思う折さえあった。

しかも余は他の日本人の如く紹介状を持って世話になりに行く宛もなく、又在留の旧知

とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物の為め若くは用達の為め出あるかねばならなかった。無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用仕様とすると、どこへ連れて行かれるか分らない。此広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何等の便宜をも与える事が出来なかった。余は已を得ないから四ツ角へ出る度に地図を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時は又外の人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出逢う迄は捕えては聞き呼び掛けては聞く。かくして漸くわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのは恰も此方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思う。来るに来所なく去るに去所を知らずと云うと禅語めくが、余はどの路を通って「塔」に着したか又如何なる町を横ぎって吾家に帰ったか未だに判然しない。どう考えても思い出せぬ。只「塔」を見物した丈は慥かである。「塔」其物の光景は今でもありありと眼に浮べる事が出来る。前はと問われると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。恰も闇を裂く稲妻の眉に落ると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点の様だ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云う怪しき物を蔽える戸帳が自ずと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時

の流れが逆しまに戻って古代の一片が現代に漂い来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

此倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだとき、余は今の人か将た古えの人かと思う迄我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいいながら物静かな日である。空は灰汁桶を搔き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸って居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いて居るかと思わる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつ迄も同じ所に停って居る様である。伝馬の大きいのが二艘上って来る。只一人の船頭が艫に立って艪を漕ぐ、是も殆んど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちらちらする、大方鷗であろう。見渡した処凡ての物が静かである、物憂げに見える、眠って居る、皆過去の感じである。そうして其中に冷然と二十世紀を軽蔑する様に立って居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有ん限りは我のみは斯くてあるべしと云わぬ許りに立って居る。其偉大なるには今更の様に驚かれた。此建築を俗に塔と称えて居るが塔と云うは単に名前のみで実は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形状はあるが、何れも陰気な灰色をして前世紀の紀念を永劫に伝えんと誓える如く見える。九段の遊就館を石で造って二三十並べてそうして其を虫眼鏡で覗いたら或は此「塔」に似たものは出来上りはしまいかと考えた。余

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空気の中にぼんやり立って眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾が脳裏に描き出して来る。朝起きて啜る渋茶に立つ烟りの寐足らぬ夢の尾を曳く様に感ぜらるる。暫くすると向う岸から長い手を出して余を引張るかと怪しまれて来た。今迄佇立して身動きもしなかった余は急に川を渡って塔に行き度なった。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡ってからは一目散に塔門迄馳せ着けた。見る間に三万坪に余る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鉄屑を吸収し了った。門を入って振り返ったとき、

憂の国に行かんとするものは此門を潜れ。
永劫の呵責に遭わんとするものは此門をくぐれ。
迷惑の人と伍せんとするものは此門をくぐれ。
正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。
我が前に物なし只無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。
此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

という句がどこぞに刻んではないかと思った。余は此時既に常態を失って居る。

空濠にかけてある石橋を渡って行くと向うに一つの塔がある。是は丸形の石造で石油タンクの状をなして恰も巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。其中間を連ねて居る建物の

下を潜って向へ抜ける。中塔とは此事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。真鉄の盾、黒鉄の甲が野を蔽う秋の陽炎の如く見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出ずる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なりとて蟻の如く塔下に押し寄せて犇めき騒ぐときも亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖来る時は祖を殺しても鳴らし、仏来る時は仏を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今いずこへ行ったものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは寂然として既に百年の響を収めて居る。

又少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古来から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟から此門迄護送されたのである。彼等が舟を捨てて一度び此門を通過するや否や娑婆の太陽は再び彼等を照さなかった。テームスは彼等にとっての三途の川で此門は冥府に通ずる入口であった。彼等は涙の浪に揺られて此洞窟の如く薄暗きアーチの下迄漕ぎ付けられる。口を開けて鰯を吸う鯨の待ち構えて居る所迄来るや否やキーと軋る音と共に厚樫の扉は彼等と浮世の光りとを長えに隔てる。彼等はかくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食われるか明後日食われるか或は又十年の後に食われるか鬼より外に知るものはない。此門に横付に

つく舟の中に坐して居る罪人の途中の心はどんなであったろう。櫂がしわる時、雫が舟縁に滴たる時、漕ぐ人の手の動く時毎に吾が命を刻まるる様に思ったであろう。白き髯を胸迄垂れて寛やかに黒の法衣を纏える人がよろめきながら舟から上る。是は大僧正クランマーである。青き頭巾を眉深に被り空色の絹の下に鎖り帷子をつけた立派な男はワイアットであろう。是は会釈もなく舷から飛び上る。はなやかな鳥の毛を帽に挿して黄金作りの太刀の柄に左の手を懸け、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、軽げに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗いて、向う側には石段を洗う波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテームス河とは堤防工事の竣功以来全く縁がなくなった。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔しの名残りに其裾を洗う笹波の音を聞く便りを失った。只向う側に存する血塔の壁上に大なる鉄環が下がって居るのみだ。昔しは舟の纜を此環に繋いだという。

左りへ折れて血塔の門に入る。今は昔し薔薇の乱に目に余る多くの人を幽閉したのは此塔である。草の如く人を薙ぎ、鶏の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのは此塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の様な箱があって、其側らに甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立って居る。頗る真面目な顔をして居るが、早く当番を済まして、例の酒鋪で一杯傾けて、一件にからかって遊び度という人相である。塔の壁は不規則な石を畳み上げて厚く造ってあるから表面は決して滑ではない。所々に蔦がからんで

居る。高い所に窓が見える、建物の大きい所為か下から見ると甚だ小い。鉄の格子がはまって居る様だ。番兵が石像の如く突立ちながら腹の中で情婦と巫山戯て居る傍らに、余は眉を攢め手をかざして此高窓を見上げて佇ずむ。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日影がさし込んできらきらと反射する。やがて烟の如き幕が開いて空想の舞台がありありと見える。窓の内側は厚き戸帳が垂れて昼もほの暗い。窓に対する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣りの室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切りが設けられて居る。只其真中の六畳許りの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽われて居る。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸体の女神の像と、像の周囲に一面に染め抜いた唐草である。石壁の横には、大きな寝台が横わる。厚樫の心も透れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と葡萄の葉が手足の触るる場所丈光りを射返す。此寝台の端に二人の小児が見えて来た。一人は十三四、一人は十歳位と思われる。幼なき方は床に腰をかけて、寝台の柱に半ば身を倚たせ、力なき両足をぶらりと下げて居る。右の肱を、傾けたる顔と共に前に出して年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝の上に金にて飾れる大きな書物を開げて、其あけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔かにしたる如く美しい手である。二人とも烏の翼を欺く程の黒き上衣を着て居るが色が極めて白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、偖は眉根鼻付から衣装の末に至る迄両人共殆んど同じ様に見えるのは兄弟だからであろう。

兄が優しく清らかな声で膝の上なる書物を読む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折の様を想い見る人こそ幸あれ。日毎夜毎に死なんと願え。やがては神の前に行くなる吾の何を恐るる……」

弟は世に憐れなる声にて「アーメン」と云う。折から遠くより吹く木枯しの高き塔を撼がして一度びは壁も落つる許りにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に顔をすり付ける。雪の如く白い蒲団の一部がほかと膨れ返る。兄は又読み初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思え。夜ならば翌日ありと頼むな。覚悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ恥の極みなる……」

弟又「アーメン」と云う。其声は顫えて居る。兄は静かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて外の面を見様とする。窓が高くて脊が足りぬ。床几を持って来て其上につまだつ。百里をつつむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が写る。屠れる犬の生血にて染め抜いた様である。兄は「今日も亦斯うして暮れるのか」と弟を顧みる。弟は只「寒い」と答える。「命さえ助けて呉るるなら伯父様に王の位を進ぜるものを」と兄が独り言の様につぶやく。弟は「母様に逢いたい」とのみ云う。此時向うに掛って居るタペストリに織り出してある女神の裸体像が風もないのに二三度ふわりふわりと動く。

忽然舞台が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着て悄然として立って居る。面影は青白く窶れては居るが、どことなく品格のよい気高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと内から一人の男が出て来て恭しく婦人の前に礼をする。

「逢う事を許されてか」と女が問う。

「否」と気の毒そうに男が答える。「逢わせまつらんと思えど、公けの掟なれば是非なしと諦め給え。私の情売るは安き間の事にてあれど」と急に口を緘みてあたりを見渡す。濠の内からかいつぶりがひょいと浮き上る。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に与えて「只束の間を垣間見んとの願なり。女人の頼み引き受けぬ君はつれなし」と云う。

男は鎖りを指の先に巻きつけて思案の体である。かいつぶりはふいと沈む。ややありていう「牢守りは牢の掟を破りがたし。御子等は変る事なく、すこやかに月日を過させ給う。心安く覚して帰り給え」と金の鎖りを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「如何にしても逢う事は叶わずや」と女が尋ねる。

「御気の毒なれど」と牢守が云い放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云いながら女はさめざめと泣く。

舞台が又変る。

丈の高い黒装束の影が一つ中庭の隅にあらわれる。苔寒き石壁の中からスーと抜け出た様に思われた。夜と霧との境に立って朦朧とあたりを見廻す。暫くすると同じ黒装束の影が又一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかかる星影を仰いで「日は暮れた」と脊の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com